

2021年4月11日 説教「あなたとともに」

マタイの福音書 28章 11～20節

今朝もマタイの福音書から、先週の復活記事の続きを学びます。



1. 復活ともみ消し工作 (11～15節)

- ① 番兵の報告 (11) **「女たちが行き着かないうちに、もう、数人の番兵が都に来て、起こった事を全部、祭司長たちに報告した。」** マグダラのマリヤとアルバヨの子ヤコブの母マリヤは、御使いからキリストの復活を聞いて喜んで弟子達に伝えに行きました。その途上、復活の主に出会って礼拝しました。命ぜられるままに弟子達の所に向かいました。しかし、彼らが到着する前のことです。墓の番をしていた兵達、都エルサレムに来て、自分たちが見たことを全部、祭司長たちに報告したのです。彼らは、輝く白い衣を着た御使いが現れた時に、墓石が開いて、中にはキリストの遺体がなくなっていたこと、女たちがそこに来ていたことなどを伝えたことと思われます。
- ② 祭司長たちの策略 (12～14) **「そこで祭司長たちは民の長老たちとともに集まって協議し、兵士たちに多額の金を与えて、こう言った。『夜、私たちが眠っている間に、弟子たちがやって来て、イエスを盗んで行った。』と言うのだ。もし、このことが総督の耳に入っても、私たちがうまく説得して、あなたがたに心配をかけないようにするから。」** それを聞いた祭司長たちは苦慮しました。このニュースが広まってしまうと、大変なことになるかと予想し、民の長老たちと集まって相談しました。その上で、やってきた兵士たちには口止め、多額の金を渡し言ったのです。眠りこけている間に、イエスの弟子達が遺骸を盗んで行った、と触れ回るようにというお達しでした。仮に総督にそれが伝わったとしても、兵士たちが罰せられないように、手筈しておくからということを使い添えての計略でした。
- ③ 事実とは異なる伝達 (15) **「そこで、彼らは金をもらって、指図されたとおりにした。それで、この話が広くユダヤ人の間に広まって、今日に及んでいる。」** 金で買収された兵士たちは祭司長や長老たちに言われた通りに、彼らが見た事実とは違う内容を周辺に伝えました。そこで、そのニュースは当時のユダヤ人社会に、それ相当に広まっていたのです。

2. ガリラヤの山で (16～18節)

- ① ガリラヤの山に登り (16) **「しかし、十一人の弟子たちは、ガリラヤに行き、イエスの指示された山に登った。」** 一方、11人の弟子達は、女たちを通して伝えられたことに従い、ガリラヤに行きました。およそ100キロの道ですから2～3日の経過があったでしょう。聖書記事にはありませんが、女たちから具体的な山の名前も伝えられていたと考えられます。弟子達はガリラヤの、その山に登って復活の主にお会いしたのです。

②復活の主に会い (17)「そして、イエスにお会いしたとき、彼らは礼拝した。しかし、ある者は疑った。」復活の主はお言葉通り、そこに現れて下さいました。彼らは復活の主を前にして、マリヤたちと同様、礼拝したのです。しかし、全員が信じられたわけではありません。ヨハネの福音書を見ると、トマスは他の弟子達が復活の主に出会った時に不在でしたので、見なければ信じないと言いました。後に出会った時には信じました。そこでこの部分はトマスのことを指しているわけではないかもしれませんが、信じられない者もいたのです。疑いの心を持ったほどでした。あなたは復活を信じますか。

③いっさいの権威が (18)「イエスは近づいて来て、彼らにこう言われた。『わたしは天においても、地においても、いっさいの権威が与えられています。』」以下は復活のキリストの弟子達へのご命令です。それに先立ち、イエスはご自身が「天においても、地においても、いっさいの権威が授けられている」と述べられました。権威とは何でしょう。何かを行う時の最終的で確かな拠り所、力、許可といったものです。それを天地においてまかされている。これから述べることも、その権威に基づいていると言われました。

3. 復活の主のご命令 (19~20 節)

①あらゆる国の人々を (19)「それゆえ、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。」これは大宣教命令と言われます。その第一は「あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子とせよ」というものでした。主にユダヤ人を相手に働きをされてきたキリストが、「全世界の造られた人々」にキリストの福音を伝える (マルコ 16:15) ことを命ぜられたのです。国という言葉は、部族という意味もあり、あらゆる部族にまで伝え、彼らをキリストの弟子としなさい、と命ぜられているのです。この命令に答えて、海を越えて伝える人々がいたからこそ、私達も福音を知ることができたのです。2月に来られた、すずききよか姉とファンさんが、チベット族に伝えんとしているのも、キリストのこのお言葉が下地にあることは間違いありません。

②バプテスマを授け (19~20)「そして、父、子、聖霊の御名によってバプテスマを授け、またわたしがあなたがたに命じておいたすべてのことを守るように、彼らを教えなさい。」第二に、キリストを信じた者に対しては、バプテスマ (洗礼) を授けることを命じました。三位一体の神の御名によって、洗礼が授けられる時、その人に神の国 (永遠の教会) の一員であるしるしが与えられるのです。地上的に言えば、地域の教会に加えられていくということでもあります。第三に、キリストがこれまでに教え、語られたことを守るように教えなさい、とも命じておられます。たとえば「あなたがたは互いに愛し合いなさい」 (ヨハネ 13:34) も大事なご命令です。

③ともにいる (20)「見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなた

がたとともにいます。」そして、最後には慰めと励ましに富んだお約束が伝えられます。それは、主が世の終わりまで、いつもキリストを仰ぐ者たちと共にいてくださる、というものでした。人間には寄り添ってくれる存在が必要です。多くの人々は、人間にそれを求めます。生身の人間であれば、当然のことです。しかし、人間はあてにならない面もあります。実際、その愛、能力、知恵において、人間には制約があります。キリストは、いかなる場面や状況においても、伴ってくださいます。この方こそ、真に頼りになるお方です。この方が、絶えず寄り添ってくださるというお言葉を信じ、お頼りしたいものです。

《結論》 弟子達がイエスの遺骸を隠したとするならば、キリストの福音は拡がらなかつたでしょう。偽りはどこかで表に出ますし、偽りから弟子達に復活の

確信は生まれなかつたでしょう。

さて、復活の主は弟子達に権威をもって、大宣教命令をなさいました。主が

パレスチナの一隅から、民族、国、海を越えての福音宣教を命ぜられたのは

驚きです。主には広い世界が見えていたのでしょうか。そして、世界に福音が広がっていくことを予知しておられたのでしょうか。

キリスト信徒となった人々に、復活の主が命ぜられたのは「信者となった者

に対し、父、子、聖霊の御名によってバプテスマを授ける」ことでした。先週の

復活節の主日、私どもの教会においては、土屋光代姉と雅史兄の洗礼式が

行われました。人間の計画を越えた不思議な神の導きにより、与えられた出

来事でした。今朝、改めて覚えておきたいことは、2000 年も前によって命ぜ

られた信者へ洗礼を授けるようにとのご命令が、お二人のうちに実現したと

いうことです。それも大きな距離を隔てた島国において蒔かれた種が結実し

て、バプテスマに至ったということです。そして、何といたってこの洗礼 (バプテ

スマ) は、復活の主によって命ぜられたということを深く心に留めたいと思

います。その面ではイースターの日に洗礼をお受けになった、お二人にとっては、

二重に意義深いことであったことを覚えたいと思います。また、既に洗礼を受
けられた人々も復活の主のご命令に基づいて、受洗してきたことを確認
した
いのです。また、姉ヶ崎キリスト教会も洗礼の出来事に与ることによ
り、復活の
主を近くに覚えることができた喜びを改めて確認したいと思います。

もう一つ、主が最後に「**見よ。わたしは、世の終わりまで、いつ
も、あ**

あなたがたとともにいます。」と言われたお約束に注目したいのです。私
たちは
孤独な存在です。ある人はさみしがりやです。ある人は、不安をか
かえてい
ます。また恐れを感じています。人から棄てられて、つらい思いをし
ている人も
いるかもしれません。そんな私たちは、理解をしてくれる人、話を
聞いてくれ
る人、受け入れてくれる人などを求めます。さがします。一時的であ
っても、そ
の時だけであったとしても、そのような人に出会えれば幸いです。

しかし、今
ここでイエス・キリストが伝えてくださっていることは、世の終わり
までとあるよ
うに、期限なしにともにいてくださるといなのです。それも、いつも
とあるように
どんな時にも、ともにいてくださるといなのです。あの人は肝腎な
時にいない、
などと言われることがあります。主イエス・キリストは、いつも共
にいてくださ
るのです。ここで確認しておきたいのは、伴ってくださるのは、復活
の主だとい
うことです。つまり、死を越えて復活されたキリスト。まことの希望
をもたらして
くださる主が、絶望しやすい私たちにともなってくくださるといこと
なのです。

今、あなたは落胆していますか。復活の主を見上げましょう。今、
あなたは
生きる力や希望を失っていますか。あなたとともなってくくださる復活
の主が、
真の生きる力や希望を与えてくださいます。最高のカウンセラーであ

る復活
の主が、どこまでも、いつも一緒にいてくださるのです。その主に呼
びかけをし
てみましょう。復活の主を頼りにして歩いていこうではありませんか。